

オーストリア資本理論の独自性と多様性*

——資本機能と企業家の観点から——

赤塚 一 範

I はじめに

オーストリア学派の経済学者たちは独自の資本理論を構築・発展させることによって、生産に資本が不可欠となっている現実を理解しようとした。実際、学派の出発点であるメンガーの『国民経済学原理』（1871）（以下『原理』）において、資本に関する基本的なアイデアが示されて以来、代表的なオーストリアンたちの多くは、資本に関して何らかの示唆を与えている。Horwitz (2000, 41) は、資本理論の研究によって、オーストリア学派独自のアプローチに関してより深い理解を得ることができると指摘しているが、むしろこれが意味することは、オーストリア学派と資本理論の不可分性であろう。つまり、「景気循環理論」、「自生的秩序論」、「経済計算論」、「市場プロセス論」、「知識論」、「企業家論」などの領域で知られているオーストリア学派の独自性を正確に把握するためには、資本理論の研究はなくてはならないものであるのだ。

とはいえ、このことは、オーストリア学派の中に、唯一の「オーストリア資本理論」が存在することを意味しない。Hayek ([1941] 2007, 67-68 / 訳 [II 8] 53, 263) は、資本理論に「オーストリア」という修飾語をつけることに疑問を呈し、オーストリア資本理論の多様性を指摘した。つまり、オーストリア学派を代表する経済学者であるカール・メンガー、オイゲン・フォン・ベーム-バヴェルク、ヨゼフ・シュンペーター、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス、フリードリッヒ・ハイエクたちは、共通の「オーストリア」理論ではなく、それぞれ独自の理論を構築したのである。そして、このオーストリア資本理論の多様性は、現代にまで引き継がれている。

しかしながら、資本理論を踏まえてオーストリア学派の特徴を理解するという試みにとって、この多様性は障害となる。なぜならば、異なった出発点や基礎を持つ理論が、同じ理論体系に分類されることは稀であるからだ。従って、オーストリア学派経済学と資本理論の関係を把握する

* 本稿は、2018年6月2日・3日に東京大学で開催された第82回経済学史学会全国大会での発表を基に作られた。作成に当たって、指導教員の尾近裕幸先生をはじめ、匿名の査読者および編集委員会から多くの示唆を、また、発表では、討論者の桑田学先生、会場から江頭進先生、塘茂樹先生、八木紀一郎先生、山本崇弘先生より貴重なコメントをいただいた。ここに深謝の意を表したい。なお、本稿の誤りの責任は全て筆者にある。

ためには、まず、多様な資本理論を整理・分類し、そこからオーストリア資本理論と呼ぶことのできる共通点、すなわち「独自性」を見つけ出さねばならないだろう。本稿の課題は、まさにここにある。

このオーストリア資本理論の「独自性」に関する学派内の先行研究として、Garrison (1985), Lewin (1999), Endres and Harper (2011), Foss and Klein (2012) などがある。これらから明らかになったオーストリア資本理論の「独自性」は、次の2点である。①ミクロ的には、資本理論に「主観主義」の適用を押し進めること、つまり、現実の世界にいる企業家の視点を理論へ導入すること、②マクロ的には、それらミクロ的行為によって経済全体に渡って構築される「資本構造」の変化のプロセスに着目すること、である。だが、近年この見解に対して異論が出され、論争が起こった。それが、2014年に *Journal of the History of Economic Thought* 誌上において行われたエンドレス&ハーパー (Endres and Harper (2011; 2014) (以下 E & H) とブラウン (Braun 2014a; 2014b) の論争である。ブラウンは、上記の企業家の行為に立ち戻って資本構造の変化に着目するというオーストリア資本理論の系譜から、貨幣資本概念を重視するメンガーやミーゼスの資本理論を区別した¹⁾。

他方、他学派からのオーストリア資本理論の研究も、ヒックスが自らを「ネオ・オーストリアン」と称して以降、数多く行われてきた。代表的なものとして、Hicks (1973), Hicks (1974), Faber (1986), Pelliger (1986), Faber, et al. (1999) がある。これらの研究においても、オーストリア資本理論の多様性は理解されているものの、議論の中心はベーム-バヴェルクの理論であり、特にラックマンやカーズナー以降のモダン・オーストリアンたちの資本理論にまで射程を広げてはいない。

本研究は、これら諸研究の延長線上にあり、特に前者の学派内からオーストリア資本理論の独自性に焦点をあてるものである。学派の独自性を説明するためには、他学派との比較は必要だが、本稿では分析の範囲を学派内に絞り、資本機能の観点から多様なオーストリア資本理論を分類・整理することと、それによって多様な理論の共通項である企業家的視点を見つけ出すことの2つに集中する。従って、本稿の分析は、筆者が想定している学派の特徴の析出にとどまるが、ここから他学派と区別しうる特徴としてのオーストリア資本理論の独自性を十分に説明することは今後の研究課題としたい。

II 節では、経済学と資本理論の関係、およびオーストリア資本理論の歴史を概観する。ここでは、資本理論の意義と、オーストリア資本理論の多様性は学派の初期から現在に至るまで存在し

1) Hicks (1974) は、資本理論を「物質主義」と「基金主義」に分類した。「基金主義」において、所得の源となるあらゆる資財は資本に含まれる。本稿の III 節で説明される「物的資本概念」と「貨幣資本概念」の分類は、ヒックスとは異なり、文字通り前者は「物的資材のストック」を、後者は「生産のために用いられる貨幣の合計」もしくは、「生産に用いる資財の貨幣価値の合計」のことを示す。IV 節では、これら資本概念をさらに企業家が用いる3つの資本機能から分類するが、ヒックスの分類ではこの資本機能の違いは見つけられない。また、Kirzner (1976, 137) は、オーストリア学派の多くを「基金主義者」とみなすヒックスの分類は、1970年代のオーストリアンには当てはまらなると指摘している。

続けていることを説明する。III節では、E & Hとブラウンの論争を用いて、多様なオーストリア資本理論の分類を見る。E & Hは、企業家による資本構造の構築とその変化のプロセスに着目し、そこから分類を行った。対して、ブラウンは、物的資本概念と貨幣資本概念を用いて分類を行った。IV節では、E & Hとブラウンの論争では決着がつかなかった資本概念の問題も、「企業家的視点」から整理・統合できることを示す。ここでは、企業の資産構成の変化のプロセスに、それぞれの資本概念をあてはめることで、「購買」、「生産要素」、「経済計算」という3つの資本機能から、それぞれの資本理論を整理した。企業家は、現実時間の中で、これら3つの資本機能を利用して生産を行う。この「企業家的視点」こそが、本稿で主張するオーストリア資本理論の「独自性」である。だが、この共通の視点を持ちつつも、特定の資本機能の強調が資本理論の多様化をもたらした。本稿では、これらのことを明らかにする。

II オーストリア資本理論の系譜

1. 経済学と資本理論

「資本」は、その名が示す通り資本主義社会の中心概念である²⁾。なぜならば、この社会において生産を行うためには、必ず「資本」が必要となるからだ。従って、経済学においても、資本に関する理論は、ときに過重な量の課題を解明すべきものとして負わせられる。しかし、このことが、学問上における資本理論の混乱や困難の主要な原因となった。社会の中心たる資本は、多面的な機能を持ち、様々な経済の問題と関連する。この資本の多機能性は、同時に理論化の困難さをも意味しており、これが資本理論を論争的なものにした³⁾。

Solow (1963, 9-16) は、資本理論において問題の設定そのものが間違っているために論争が絶えないとし、資本理論の単純化を主張した。そして、投資の「収益率」を資本理論の中心的問題とみなすことで、理論の単純化を正当化した。この主張を最も表しているものが、 $Y=F(K, L)$ で示される新古典派生産関数であろう。ここでは、資本は粘土やゼリーのように自由に形を変えられることができる同質な生産要素 K と、同じく労働は同質な生産要素 L とみなされる。これら資本 K と労働 L は、所与の関数関係に従って、生産物 Y を産出する。この新古典派モデルから、

2) 本稿において、「資本主義社会」は「市場経済の中で、企業家が資本を利用して生産を行う社会」を意味する。ゾンバルトの『近代資本主義』(1902)以降、「資本主義」はマルクス派の体制認識の用語として用いられるようになった。オーストリアンの多くも「資本主義」、「資本主義的社会」、「資本主義的生産」などの言葉を用いている。マルクス派では生産=分配の総過程を資本の理論で捉えようとするのに対し、オーストリアンはより分節化して企業家の人格的働きに着目する。Schumpeter ([1911] 1934, ix; 69), Mises ([1949] 1996, 269 / 訳 303), Strigl ([1934] 2000, 2), Hayek ([1941] 2007, 31 / 訳 [II 8] 3), Kirzner (2018, 82-97) を参照。

3) 中山 (1973) は、資本理論は「再生産の理論であり、発展の理論であり、生産の理論であり、要するに経済全体の変動と問題とがすべて含まれている」(中山 1973, 1) ために、扱いにくく論争的なものとなったと指摘している。

均衡状態において投資の収益率は生産関数を資本 K で微分することで求められる資本の限界生産物と一致する、という結果が求められる。確かに、このような資本理論は、非常に明瞭であり、そのフレームワーク内において論争の余地はなくなったと言える。だが、この単純化は、資本に関連する他の多くの重要な問題、例えば、資本構造やその変化・調整のプロセスを見えなくする⁴⁾。

他方、オーストリア学派経済学では、現実の世界にあるように資本を扱おうと試みた。つまり、複数の機能を持つ資本を簡略化することなく理論化しようとした。そして、資本を現実的に扱うための方法論が、一般的にオーストリア学派の特徴として知られている「主観主義」と「方法論的個人主義」からなるアプローチだ。

資本理論における主観主義とは、企業家的視点からの理論構築を意味する。なぜなら、資本主義社会において、生産は企業家によって担われているからだ。他方、資本理論における方法論的個人主義とは、社会全体に構築される資本構造を一人一人の企業家の行為にまで立ち返って分析することである。従って、オーストリア学派にとって、資本理論は、企業家的視点から構築されるべきものであり、企業家の分析と一体のものでなければならない。

だが、この企業家的視点からの資本理論の構築は、オーストリア資本理論の多様化を生み出した。企業家は複数の資本機能を用いて生産を行う。しかし1つの資本理論において、複数の資本機能をそれぞれ等しく扱うことは難しく、特定の資本機能を強調せざるを得ない。この結果、オーストリア資本理論は多様となった。

2. オーストリア資本理論の歴史

オーストリア資本理論のアイデアは、メンガーの『原理』（1871）に既にみられる。これは、資本理論が、学派の出発点から存在し、学派の形成に際して重要な役割を負っていたことを示している。

『原理』では、資本について「理論」と呼ぶには十分とは言い難い記述があるだけである。だが、そこではすでに「生産の時間的構造」や「消費財の予想された価値から導かれる資本財の価値法則」など、オーストリア資本理論の基礎的概念が説明されている。従って、本稿では、以後これらのアイデアをメンガーの資本理論と呼ぶことにする。メンガーは、財を「低次財（消費財）」と「高次財（資本財）」とに分けて考えることで、生産に時間的構造を導入した。また、「高次財」の価値は、「低次財」の予想された価値に依存すると考えた。この理論は、企業家機能と共に、『原理』第3章「価値の理論」の中で述べられているが、このことは、メンガーが企業家論と資本理論を共に関連付けて考えていたことを示唆している。

メンガーの資本理論は、オーストリア学派第2世代の経済学者であるベーム-バヴェルクの『資本と利子』（1884）と『資本の積極理論』（1889）によって、オーストリア資本理論として一応の完成を見る。ベーム-バヴェルクの構築した資本理論の特徴は、「生産期間」を用いることで、資

4) ただし、新古典派資本理論は、ドーマーの市場の不安定性の主張を無効化する意義があったとする見方も存在する。本稿では、新古典派資本理論との比較についてはこれ以上深入りせず、今後の研究課題としたい。

本理論に時間の概念を明示的に組み込んだことである。このことは、Hicks (1973), Faber (1986), Ahmad (1991) などによって、オーストリア資本理論の主要な特徴とみなされている。このベーム-バヴェルクの資本理論は、比較的短期間のうちにウィリアム・スマートなどによって英訳されたこと、そしてクヌート・ヴィクセルやアーヴィング・フィッシャーらの利子理論に大きな影響を与えたことなどが要因となり、学派の創設者であるメンガーの資本理論よりも広く世界的に知られ影響力を持った⁵⁾。この結果、ブローグの『経済分析の歴史』など多くの経済学説史の教科書において、ベーム-バヴェルクの資本理論がオーストリア学派を代表するとみなされるようになった。

だが、学派内にベーム-バヴェルクの理論以外にも多くの資本理論が存在するという事実が議論を複雑にする。表1に示したように、代表的なオーストリアンたちの多くは、少なからず資本に関して何らかの見解を持っていた。これは、オーストリア学派にとって、資本理論が重要であることを示唆すると同時に、過去から現在に至るまで多様な資本理論が存在していることをも意味する⁶⁾。

そして、このオーストリア資本理論の多様性は、学派の初期から、メンガーとベーム-バヴェルクの資本理論の違いとして存在していた。このことは、メンガーの「やがてベーム-バヴェルクの理論こそ、いままでに犯された最大の誤謬であることが認知されるときが来るであろう」(Schumpeter 1954, 847 / 訳(下)184)という言葉と共に広く知られている。ベーム-バヴェルクは、メンガーの資本利子論に疑問を抱く中で『資本と利子』を執筆した。対して、メンガーは、そのベーム-バヴェルクの理論に対抗するために「資本について」を発表し、さらにベーム-バヴェ

表1 代表的なオーストリアンの資本に関する研究

資本理論に触れている著作	資本理論を中心に扱った著作
Menger (1871) 『国民経済学原理』	Menger (1888) 「資本について」
Wieser (1889) 『自然価値論』	Böhm-Bawerk (1884) 『資本と利子』
Wieser (1914) 『社会経済の理論』	Böhm-Bawerk (1889) 『資本の積極理論』
Schumpeter (1911) 『経済発展の理論』	Strigl (1934) 『資本と生産』
Hayek (1931) 『価格と生産』	Hayek (1941) 『資本の純粹理論』
Mises (1949) 『ヒューマン・アクション』	Lachmann (1947) 「資本理論における補完性と代替性」
Rothbard (1962) 『人間、経済及び国家』	Lachmann (1956) 『資本とその構造』
Garrison (2001) 『時間と貨幣』	Kirzner (1966) 『資本についての小論』
	Skousen (1990) 『生産の構造』
	Lewin (1999) 『不均衡にある資本』

5) 他方、メンガーの『原理』は、1950年まで英訳されなかった。

6) オーストリア学派にとって資本理論が重要な地位を占めていることは、経済学の歴史の中で有名な3つの資本論争の内の2つにオーストリア学派が関わっていることから明らかである。また、オーストリア学派が直接関係していないケンブリッジ資本論争に関しても、Kirzner (1966) や Lachmann (1958) は、高い関心を持っていた。

ルクに誤って解釈されていると感じられた『原理』の一部に修正を加えていた⁷⁾。このメンガーのベーム-バヴェルク批判は、『原理』の改定版が彼らの存命中に完成しなかったことなどにより、完遂されなかった。だが、その後の多くのオーストリアンたちは、メンガー同様、ベーム-バヴェルクの理論を批判した。

ハイエクは、ベーム-バヴェルクの資本理論を自らの景気循環論の基礎とした。だが、ハイエクは、利子や資本の理論に関するベーム-バヴェルクの貢献を認めつつも、ナイトとの資本論争や『資本の純粹理論』を書き上げる過程で、最終的にベーム-バヴェルクの生産期間の概念を放棄した。モダン・オーストリアンのラックマンは、ベーム-バヴェルクの資本理論はリカード的であってオーストリア的ではないと批判した。Lachmann (1976) によれば、ベーム-バヴェルクはリカードの「なぜ、非恒久的資源の所有者たちは恒久的な所得を享受できるのか。そして、何がその大きさを決めるのか」(Lachmann 1976, 145) という問題に正面から取り組んだ。ベーム-バヴェルクは、資本財の異質性の重要性を理解していたにも拘わらず、利子率を求めるために、資本を同質的なものとして扱った⁸⁾。従って、ベーム-バヴェルクの資本理論は利子理論の構築という関心に制約されたものとして展開されねばならなかった。ベーム-バヴェルクの資本理論に対するこのような評価は、Garrison ([1985] 2015), Lewin (1999), E & H (2011), Foss and Klein (2012) など現代のオーストリア学派の経済学者たちの間で、共有されている。

彼らにとって、オーストリア資本理論の本流は、ベーム-バヴェルクではなく、資本財の異質性とその構造を重視する Menger (1871)—Hayek (1941)—Lachmann (1956)—Lewin (1999) へと続く流れにある。これは III.2 項で詳しく説明する。しかしながら、この考えに対してブラウンから異論が出された。彼は、上記のオーストリア資本理論の流れの他に、貨幣資本概念を重視する別の流れの存在を指摘した。

III オーストリア資本理論の多様性

1. 多様な資本概念とその分類

III 節では、E & H (2011) と Braun (2014-2017) の分類を紹介することで、より詳細にオーストリア資本理論の多様性を説明するが、まず、学派内において、資本がいかに関定義されているかを簡単に見てみよう。それらを以下の表 2 のようにまとめた。

このように、オーストリア学派では、「資本」は文字通り多様に定義されている。それら多様な定義は、若干の表現上の違いを除けば、① 貨幣資本、② 物的資本、③ 自由資本 (生存基金) の 3 つに大別することが出来よう。

①に分類される資本概念では、事業を行うために企業家が用意した貨幣、もしくは諸資財の貨幣価値の合計額が資本となる。②では、工場、機械などの固定資本財、および原材料、部品など

7) 詳しくは、メンガー ([1923] 1982-84), 八木 (1988), 塘 (1984) を参照。

8) 脚注 12 も見よ。

表2 資本概念一覧

① 貨幣資本	② 物的資本	③ 自由資本 (生存基金)
Menger (1888) 「貨幣総額」 Schumpeter (1911) 「財貨の調達手段」 Mises (1949) 「経済計算の基礎的概念であり、市場における問題を処理するための、主要な精神的用具」	Menger (1871) 「高次経済財の諸数量」 Böhm-Bawerk (1889) 「中間生産物の総体」 Wieser (1889) 「朽ちやすく、動かすことのできる生産手段」 Hayek (1941) 「所得を一定に維持するための非永久的資源の総体」 Lachmann (1956) 「物的資財の(異質成分からなる)ストック」	Strigl (1934) 「迂回生産を支えるための消費財のストック」

の流動資本財など、生産に利用される物的な資材の総体が資本となる。③では、消費財の生産が完了するまでの間、労働者の生活を維持する賃金支払いのための基金(賃金基金)、もしくはそれに対応する消費財の総体(生存基金)が資本となる。このように、資本は定義そのものから分類できるが、それだけではこれら多様な資本概念を包含するオーストリア的特徴の理解にはつながらない。

E & H (2011) は、資本の定義そのものではなく、経済分析におけるメンガーの哲学的・方法論的立場を明らかにし、そこにオーストリア資本理論の特徴を求めた。図1は、E & Hが行ったオーストリア資本理論の分類を簡略化して示したものである。

E & H (2011, 359-62) は、『経済学に関する研究』(1883)と「経済科学の体系的分類へ向けて」(1889)という2つの文献を用いて、メンガーの哲学的・方法論的立場を説明した。E & Hによれば、メンガーにとって、経済理論の目的は、現実の世界に起きている現象を理解し、それらの



図1 E & H (2011) の分類

中の普遍的な法則を説明することにある。経済研究において、理論と現実世界の現象とを切り離すことはできず、経験的・現実主義的な研究態度こそが重要となる。メンガーは、経済学者たちに、その現象や出来事が、なぜそのように存在するのかを理解し説明する経済現象の「形態論的研究」を進めることを求めた。E & H は、この研究をメンガー・プロジェクトと呼んだ。これを資本理論に適用したものが、資本の形、様態、構造の性質や変化を分析する「資本の形態論的研究」である。E & H は、この「資本の形態論的研究」にオーストリア資本理論の特徴を見出し、これに沿って分類を行った。メンガーの立場を最も引き継いだのは、『資本とその構造』を記したラックマンである。ラックマンは、変化の絶えない世界における、資本構造の構築と改変のプロセスを詳細に分析した。

他方、この対極に位置するのが、バーム-バヴェルクとヴィーザーである。彼らにとって、資本とは、利子率や所得の説明、つまり帰属問題を解くための付随的な現象であったため、資本は1つの単位で扱われて形態論のダイナミクスを欠き、メンガーやラックマンの理論とはかけ離れたものとなった。

このE & H (2011) の論文に対して、Braun (2014a; 2014b) は、オーストリア資本理論の多様性を認めつつも、その分類に異を唱えた。E & H が、資本の形態論的研究から多様な資本理論を分類したのに対し、ブラウンは、資本の定義そのものから分類を行った。Braun (2014a; 2014b) の時点では、メンガーの資本理論を中心に批判が行われた。その後、ブラウンは、Braun (2015), Braun, et al. (2016), Braun (2017) などで、自身の考えを洗練していくが、これらを要約するならば、図2のように示すことができる。

ブラウンは、「物的資本」と「貨幣資本」という2つの資本概念を用いて、オーストリア資本理論を分類した。この分類によって、ブラウンはE & H が指摘したメンガーからラックマンへと続く資本理論の連続性を批判した。ブラウンによれば、メンガーは1888年の論文で、自身の資本概念を「物的資本」から「貨幣資本」へと転向した。メンガーにとって、資本とは物的資財ではなく、会計を基礎とした貨幣資本である。そして、このメンガーの資本概念を受け継いだのは、シュンペーターとミーゼスであった。

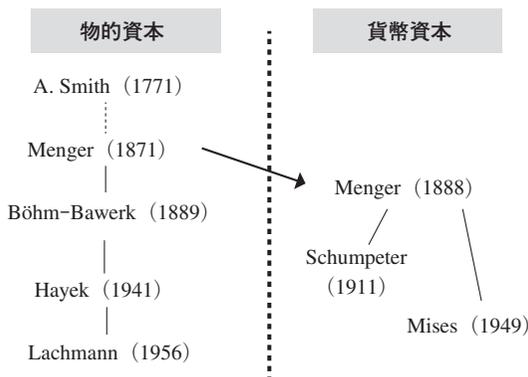


図2 ブラウンの分類

2. 資本の異質性と資本構造

本項では、E & H (2011) によるメンガーの「資本の形態論的研究」を基準にしたオーストリア資本理論の分類を説明する。E & H は、このメンガーの伝統を最も引き継いだのはラックマンであるとし、メンガー—ラックマンの流れをオーストリア資本理論の本流とした。この考えは、近年のオーストリア学派のテキストであるピーター・ベッキ編集『現代オーストリア学派経済学入門』にも引き継がれていることから分かるように、学派内において支配的となっている⁹⁾。これに従えば、資本とは異質な資本財のストックであり、その特徴は、資本財から構築される資本構造の説明にある。だが、オーストリア資本理論の特徴は、単に物的な資本構造の概念にあるのではない。その特徴は、資本構造の変化のプロセスに着目することにある。

図3、4は、それぞれベーム-バヴェルク、シュトリゲルの資本構造の描写である。これらに共通することは、異質な資本財とその組み合わせである資本構造が示されていることである。ベーム-バヴェルクは、同心円を用いて資本構造を説明した。時間は、同心円の中心から外側に向かって流れていく。円周は、財の価値を示しており、最も内側の円は最初に作られる原材料の価値を、外側の円は消費財の価値を表している。つまり、時間の経過とともに、原材料は、資本財、消費財へと変化し、その価値を増大させていく。シュトリゲルは、消費財の生産のプロセスを直線で表現した。時間は左から右へと経過するが、その経過とともに生産プロセスが進んでゆく。図では、シュトリゲルは、生産には6つのプロセスがあることを仮定している。これらの図で明らかなのは、ベーム-バヴェルクもシュトリゲルも、資本財の異質性と資本構造をはっきりと認識していたということである。

だが、E & H は、メンガー—ラックマンの流れの対極にベーム-バヴェルクやシュトリゲルの資本理論を位置づけた。この理由は、ベーム-バヴェルクやシュトリゲルが、資本財の異質性や構造を描写していながらも、その分析を均衡状態で行っており、資本構造の変化に注意を払わなかったことにある。彼らは、生産期間の概念を用いることで、時間の要素を明示的に資本理論に

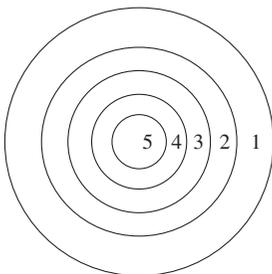


図3 出所：Böhm-Bawerk
([1889] 1930, 107)

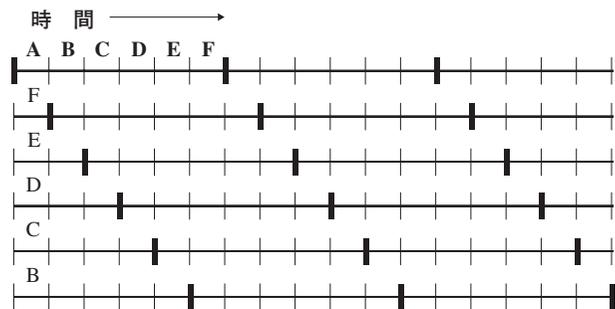


図4 出所：Strigl ([1934] 2000, 10), 筆者により一部加筆

9) 同書の資本理論の章は、Powell (2010) が執筆した。

取り入れた。しかし、それは時間を「生産期間」という一つの量をもった生産要素とみなすことにすぎなかった。ベーム-バヴェルクやシュトリグルは、所与の技術水準の下で企業家が合理的に生産を行うのであれば、より長期の生産期間の採用は、時間あたりの限界生産性を逡減させながら、生産を拡大すると考えた。これらのことは、ソローたちが構築した資本理論とベーム-バヴェルクやシュトリグルの理論が根本的に変わらないことを意味する。つまり、ソローたちは、資本を同質的な K とみなしたが、ベーム-バヴェルクらはそこに時間要素を含ませ、これを同質的な生産期間 T とみなした。どちらも同質的な資本概念だから、資本量は市場均衡による決定に委ねられた。これは、E & H がオーストリア的特徴とみなす資本の形態論的分析とは、対極に位置する。

表3は、E & H が資本理論の分類のために立てた項目の内、筆者が特にオーストリア資本理論の特徴を分析する上で重要と考えるものを抜き出したものである。このうち、オーストリア的特徴とは、左から順に「集計量的資本概念（基金）の否定（資本構造の重視）」、「企業家の見積み機能の重視」、「資本財の特殊性（異質性）の重視」、「不可逆的な時間概念の採用」、「不均衡状態の仮定」である。このオーストリア的特徴に沿った理論が、Menger (1871; 1888), Mises (1931; 1949), Lachmann (1947; 1956) である。対して、Böhm-Bawerk (1889), Wieser (1889), Strigl (1934) は、表3に示される項目のすべてにおいてメンガーたちとは正反対になっているので、表を見るだけでも、これらの2つのグループが対極に位置することは理解できる。

表3の項目について説明しよう。現実世界の時間の特徴は、将来の出来事は事前を知ることができないという不確実性と過去の出来事は変更できないという不可逆性の2つにある。この中で、

表3 E & H のオーストリア資本理論の比較

	集計的量： ストック / 基金	企業家の 見積み機能	資本特殊性	分析の領域	
				時間概念	定常状態 / 比較静学
Menger (1871, 1888)	×	○	○	不可逆的	×
Wieser (1889)	○	×	×	パラメーター	○
Böhm-Bawerk (1889)	○	×	×	パラメーター	○
Schumpeter (1911)	○	○	○	パラメーター 不可逆的	○
Strigl (1934)	○	×	×	パラメーター	○
Mises (1931, 1949)	×	○	○	不可逆的	×
Hayek (1941)	×	×	○	不可逆的	○
Lachmann (1947, 1956)	×	○	○	不可逆的	×

出所：E & H (2011, 364)、著者により修正を加え一部抜粋。

企業家は生産に用いる諸資源の価格や自身が生産する財の価格など将来の環境を見積る。この現実的時間概念とそれに対応する企業家の機能が、「不可逆的な時間概念」と「企業家の見積り機能」である。さらに、企業家は、見積った価格を基に事業計画を策定するが、この計画に従って、資本財に特殊性と補完性が付与される。特殊性とは、資本財が特定の機能を持っていることである。補完性とは、企業家の目的達成のための、特殊性を持った諸資本財の組み合わせ方のことだ。これらは企業家の計画によって与えられる。同じ資本財であっても、計画が異なればその機能や組み合わせは異なる。従って、資本の分析は、単に資本量の変化ではなく、資本財の組み合わせ、つまり、資本構造の変化に関するものでなければならない。これが、「資本財の特殊性（異質性）の重視」と「集計量的資本概念の否定」の意味することだ。企業家は、自分の期待や計画が正しいと考えるから実行する。しかし、現実世界において将来は不確実であるから、複数の企業家の期待は、必然的に異なったものとなり、異なった期待をもとに構築された諸計画は、お互い両立するものとはなり得ない。複数の企業家の計画の不調和は、最終的に損失もしくは予想外の収益を生じさせる。企業家は、結果や環境を再度解釈し、期待や計画を修正することで資本構造を改変する。このプロセスを繰り返すことで、諸計画が調和する均衡へと近づいていく。これが、「不均衡状態の仮定」の意味することである。

現実の世界では、企業家の将来予想と計画の策定と修正によって、異質な資本財から構築される資本構造が変化していく。E & Hにとって、この資本構造の変化のプロセスの分析こそオーストリア資本理論の特徴である。以上のようなオーストリア資本理論の分類に対峙したのがブラウンだ。

3. 貨幣資本と経済計算

貨幣資本概念を重視する立場から、Braun (2014a) は E & H (2011) によるオーストリア資本理論の分類を激しく非難した¹⁰⁾。

この論争における Braun (2014a; 2014b) の批判の要点は、以下の3点である。① E & H (2011) は、メンガーとラックマンを一括りにして論じたが、それは間違いだ。なぜならば、② メンガーは、Menger (1888) において、自身が以前に Menger (1871) で提示した物的資本概念を撤回 (recantation) し、事業計算 (business calculation) のための会計を基礎とした貨幣資本概念を支持したのに対して、③ ラックマンは物的資本概念を支持し、会計に基づく貨幣資本概念を否定したからだ¹¹⁾。

10) 以下が示すように、論争は激しいものであった。Braun (2014a) は、E & H (2011) の主張に対し「全く支持することができない」(Braun 2014a, 101) と真っ向から異を唱えた。一方、E & H (2014) も、ブラウンの反論に対し「そんなのは嘘っぱちである」(E & H 2014, 106) と非難している。

11) 撤回という用語は、ブラウンの批判を要約する際、E & H (2014, 103) が用いたものである。Braun (2014b) も E & H への返答の中で「彼(メンガー)の初期の視点は撤回されたと解釈されなければならない」(Braun 2014b, 113) と結論付けた。

論争において、ブラウンの批判はメンガーの資本理論を中心に展開されるが、その後 Braun (2015), Braun, et al. (2016), Braun (2017) などで、議論を学派全体にまで拡大する。これらを要約したものが先に示した図 2 である。そこで示したように、オーストリア学派の中には、メンガー (Menger 1871), ベーム-バヴェルク, ハイエク, ラックマンに代表される異質な物理的資本概念と、メンガー (Menger 1888), シュンペーター, ミーゼスに代表される同質な貨幣資本概念の 2 つがある。この分類に従えば、明らかに E & H の分類、つまりメンガー、ミーゼス、ラックマンの三者を同じ資本理論の系統として扱うことは不適切である。

次に、E & H (2011) への批判の詳細を見てみよう。まず、Braun (2014a) は、E & H がメンガーの資本理論の基礎とみなしている『原理』に関して、「それには包括的な資本理論が含まれていないと言わざるを得ない」、「Menger (1871) は資本をぞんざいに扱っただけ」(Braun 2014a, 99) と主張する。Braun (2014a, 100) にとって、メンガーの資本理論の中核は、『原理』ではなく、唯一資本概念を詳細に検討した「資本について (Zur Theorie des Kapitals)」(1888) にある。メンガーは、そこで以下のように、「資本の現実的概念 (Realbegriff des Kapitals)」を明らかにした。

ビジネスマンや法律家が資本について話すとき、それは原材料、補助的資財、商品、機械、建物、その他の財を意味しない。スミス学派の専門用語がまだ共通の言葉として広がっていないところでは、資本はいつでも貨幣総額のことだけを示す。

(Menger [1888] 1935, 171)

「資本の現実的概念」の「現実的」とは、「現実の世界で広く使われている」という意味である。メンガーは、アダム・スミス以降、経済学で一般的となっていた物的資本概念ではなく、現実世界のビジネスマンや法律家が実際に使用している資本概念、つまり、会計的な貨幣資本こそ、経済学者が採用すべき資本概念であるとした。さらに Braun (2014a, 100) は、以下の引用を用い、ラックマンはメンガーが支持した会計的な資本概念を否定したと主張する。

私たちは、企業会計や社会会計など、資本会計という共通の尺度が最も重要となる会計士の視点を採用する経済学者から学ぶものは何もない。そして、ほとんどの経済学者は、その会計士の視点を暗黙のうちに採用している。

(Lachmann [1956] 1978, 72)

このように、メンガーはかつて自身が提示した物的資本を撤回し、ラックマンの否定する貨幣資本を自らの資本概念とした、とブラウンは結論付けた。

これらブラウンの批判は、ある重要な意義を持っているが若干強引である。確かに Menger ([1888] 1935) は、貨幣資本概念の重要性を主張した。だが、E & H (2014) が批判するように、メンガーは過去に彼自身が『原理』で述べた物的資本概念を「撤回」と明記しているわけではない。また、物的資本概念の撤回は、メンガーが『経済学に関する研究』や「経済科学の体系的分類へ向けて」などで述べた「資本の形態論的研究」という方法論・哲学的立場とも矛盾するが、ブラウンはこれに関して何も述べていない。さらに、E & H は言及していないが、ラック

マンがメンガーの支持した貨幣資本を否定したというブラウンの結論付けも早計である。確かに、ラックマンは会計士の視点に基づく資本概念を批判した。だが、それをそのままメンガーやミーゼスたちが提示した貨幣資本概念の否定と考えることはできない。むしろ、上記の批判は、均衡状態を仮定することで生じる同質的資本概念を採用したバーム-バヴェルクの資本理論、もしくはクラーク、ナイトなど新古典派の資本理論へと向けられたものと考えの方が妥当である。つまり、上記のラックマンの批判は、均衡を仮定することで生じる同質的資本概念の起源が会計にあると述べたに過ぎず、貨幣資本概念そのものへの批判ではない。これを裏付けるように、ラックマンは『資本とその構造』第2版の前書きで、同質的資本概念を採用するソローに対しても、同様の批判を向けている¹²⁾。さらに、ラックマンは資本金を事業の「成功もしくは失敗をテストするための制度的装置」(Lachmann ([1956] 1978, 36))と見ていたが、この考えは、メンガーやミーゼスの貨幣資本理論と矛盾しない。

だが、ブラウンの批判は、オーストリア資本理論を理解する上で重要な視点を提供している。それが、企業家が利用する貨幣資本の「経済計算」機能である。このことは、社会主義経済計算論争に関するオーストリア学派内で起きた論争から、光を当てることでより明確化される。1990年代に、社会主義経済計算論争に関して、それまで曖昧であったミーゼスの「経済計算の問題」とハイエクの「知識の問題」とをはっきりと区別することで、オーストリア学派内に論争が生じた。この論争は、ジョセフ・サレルノなどミーゼズ研究所で中心的な研究者たちが、ミーゼスの社会主義批判の要点を理解していないリランド・イーガーなど「ハイエク主義者」たちを批判する中で激化していった¹³⁾。ミーゼス主義者たちの主張の要点は、「経済計算の問題」と「知識の問題」をカテゴリカルに区別することで、「経済計算の問題」は「知識の問題」に先立つものであり、経済計算の基礎となる現実世界の価格とその価格の形成プロセスこそが重要だ、ということであった。

資本理論の分類に際して「貨幣資本概念」を「物的資本概念」から区別するブラウンの主張は、明らかに「経済計算の問題」を「知識の問題」から区別したサレルノらミーゼス主義者たちと同じ意図を持っている。サレルノたちは、ミーゼスとハイエクの議論を区別することで、経済計算のための貨幣価格の重要性を訴えた。同様に、ブラウンは、Menger (1888) と Menger (1871) を区別することで、経済計算のために企業家によって利用される貨幣資本概念の重要性を訴えた。このブラウンの主張は、サレルノたちの指摘が市場プロセスの理解を深めるのに役立ったのと同

12) ラックマンは一貫して、新古典派の同質的資本概念を否定している。このことは、たびたびラックマンが、ソローに代表される新古典派資本理論 (Capital Theory) とハイエクに代表されるオーストリア資本理論 (Theory of Capital) を標記の上でも区別したことからも分かる。この区別は、ハイエクの *The Pure Theory of Capital* (1941) とソローの *Capital Theory and The Rate of Return* (1963) に由来する (下線は著者による強調、以下も同様)。Lachmann (1976, 145-47; [1956] 1978, vii) は、バーム-バヴェルクの資本理論をソロー側に分類される Austrian Capital Theory と呼ぶことで、ハイエク的な Austrian Theory of Capital に分類される自身の資本理論 (Theory of Capital) との違いを強調した。

13) この論争の詳細は尾近 (2003) に詳しい。

様に、資本機能の理解を深めるのに役立つものである。

IV オーストリア資本理論の独自性

1. 資本概念と資産構成の変化

これまで、E & H とブラウンによるオーストリア資本理論の分類を見た。彼らは共に、企業家的視点にオーストリア資本理論の特徴を見出した。しかし、資本概念に関して彼らの見解は一致していなかった。本節では、バランスシート（以下 B/S）を基に筆者が作成した企業の資産構成の変化のプロセスを示す図にそれぞれの資本概念を位置づけることで、資本の機能から多様な資本理論を分類する。これによって、E & H とブラウンの論争では決着がつかなかった物的資本と貨幣資本に関する問題も、「企業家的視点」から整理・統合できることを示す。

この位置づけの利点は、第 1 に、現実世界の企業家の視点に立つことが可能となることにある。現実において企業家は、B/S を事業の指針として利用しているが、これは本節における分析が現実の企業家的視点に即していることを示している。第 2 に、資産構成の変化を追っていくことで、貨幣⇒資本財⇒消費財⇒貨幣という生産プロセスの全体を把握できることが挙げられる。このプロセス全体から資本を分析することで、企業家的視点と複数の資本機能の関係を明確化することができる。そして、この方法は、メンガー、ミーゼス、ラックマンといったオーストリアンたちが、B/S からの視点を持っていたということから正当化できる¹⁴⁾。

図 5 は、多様な資本概念を、企業の資産構成の変化のプロセスにあてはめたものである。これにより、オーストリア学派の多様な資本理論は、大きく 3 つの資本機能から成り立っていることが明らかとなる。それが資本の①「購買」機能、②「生産要素」機能、③「経済計算」機能である。次に、これらの資本機能について説明しよう。

① 資本の「購買」機能

事業を始めるに当たり企業家は、資金を集める。Menger (1888), Schumpeter (1911), Mises (1949) にとって、これが資本となる。企業家は、この資金を用いて資材や労働を購入する。これが貨幣資本の「購買」機能である。とりわけ、シュンペーターの経済発展の理論にとって、この資本概念は重要である。なぜならば、彼の理論では、銀行の信用創造によって調達される貨幣資本は、均衡状態にある既存の資本構造を破壊し、新たな資本構造の構築のための原資となるからである。他方、メンガー、ミーゼスにとって、貨幣資本は、「購買」機能のためだけでなく、後で説

14) メンガーやミーゼスの貨幣資本概念は、明らかに B/S を基にしている。このことを踏まえた研究として、藤田 (2005) は、メンガーの『一般理論経済学』の中に、現代会計にとってより正確な利益計算のための指針が含まれていると指摘している。尾近 (1998) は、ミーゼスの市場プロセス論には、その制度的基礎として損益計算を行うための会計システムが存在していると指摘している。また、ラックマンもこの B/S からの視点を持っていた。彼は、『資本とその構造』で、企業の資産構造の変化のプロセスを詳細に分析している (Lachmann [1956] 1978, 86-99)。

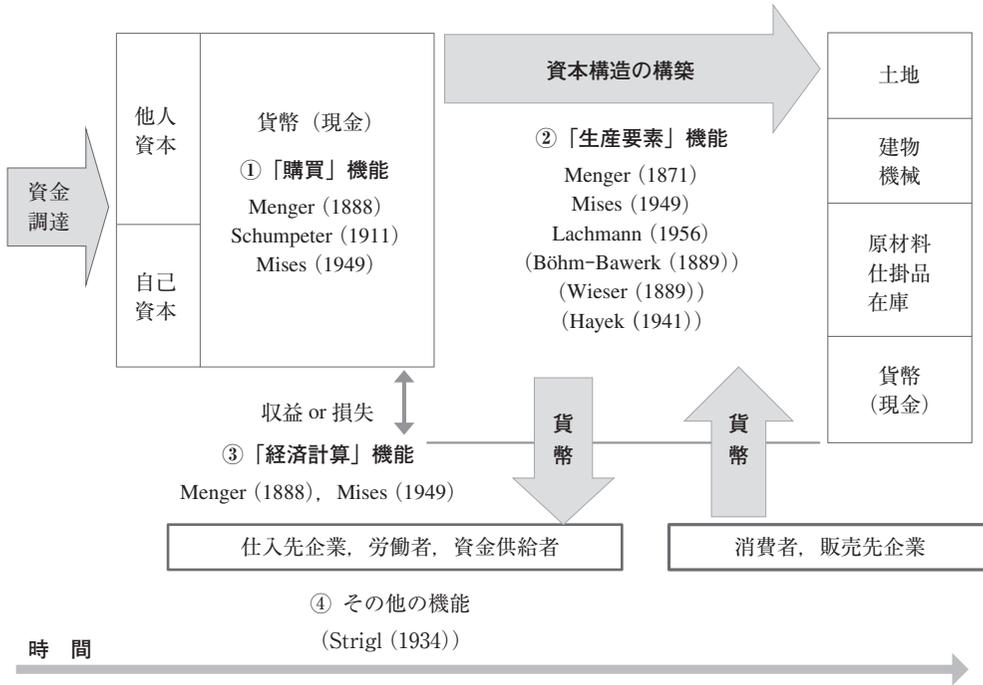


図5 資産構成の変化と資本概念¹⁵⁾

明するように「経済計算」機能のために重要となる。

② 資本の「生産要素」機能

次に企業家は、資金を元手に、土地や建物、機械など固定資本財、原材料など流動資本財を購入し、資金の一部は、労働者への賃金支払いやリスクに備えて現金で保有する。企業家は、それら多様な財と雇用した労働者とを組み合わせる生産を行う。Menger(1871), Böhm-Bawerk(1889), Wieser (1889), Hayek (1941), Lachmann (1956) らにとって、これら物質的な資本財こそが資本であった。Mises (1949) も、貨幣資本の「経済計算」機能を強調しつつ、物的資本の意義を認めている¹⁶⁾。だが物的資本は、単なる資本財の集まりではない。企業家は、これら様々な資本財を水平的・垂直的に適切な形で組み合わせ、資本構造を構築することで、生産を行う。これが物的資本の「生産要素」機能である。とりわけ、ラックマンは、企業家の計画、資本財の補完性、経済全体の資本構造の3つの関係を詳細に分析した。他方、ベーム-バヴェルク、ヴィーザー、ハイエクなどは、企業家機能が重要でなくなる均衡状態を仮定し、経済全体の資本構造を論じた¹⁷⁾。従って、彼らの資本理論は括弧書きで示される。

15) 最も左の列が、B/Sの貸方における負債および純資産を示しており、それ以外の列はB/Sの借方における資産（固定資産、流動資産）を示している。

16) Mises ([1931] 1960) は、物的資本概念を基礎として資本財の転用に関する議論を展開した。

17) だが、IV.3項で説明するように、彼らも企業家機能を重視していた。

③ 資本の「経済計算」機能

Menger (1888), Schumpeter (1911), Mises (1949) にとって, 「資本」とは, 事業を行うための資金であった。しかし, シュンペーターが資本の機能を「購買」に求めたのに対し, メンガー, ミーゼスは, それよりもむしろ「経済計算」を重視した。自らの生産計画が効率的かどうか, 消費者のニーズに適合しているかどうかの判断は, 資本財の貨幣価格を用いてのみ可能となる。企業家は, 貨幣資本の形で示される諸財の貨幣価値の合計の増減によって表わされる収益・損失をもとに自らの事業の適切さを判断する。図5を用いて説明するならば, 生産に用いた資金の総量である左から二番目の列の長さとする期末の資産の総量を示す左側の列の長さとを比較することでそれはなされる。特に, ミーゼスは, 貨幣資本を用いてなされる「経済計算」こそ, 資本主義下の企業と社会主義下のそれとを区別する決定的な点であると考えた¹⁸⁾。

④ それ以外の資本機能

Strigl (1934) は, ベーム-バヴェルクの迂回生産理論を用い, 消費財が生み出されるまでのあいだ労働者の生活を支える消費財の総体(生存基金)を資本と定義した。図では, 企業家が支払う賃金の部分がここに相当する。だが, これが資本とみなされるためには, 労働者が購入する消費財の構成が一定となる均衡状態を仮定しなければならない。本節では, 資産構成の変化のプロセスという動態を扱っているので, 彼の資本概念をこの図表の中に位置づけることはできない。従ってシュトリグルは括弧書きとした。ただし, 企業家がいくら賃金を支払うかという問題は, Lachmann ([1956] 1978, 90) が論じているように, 資本構造の問題でもある。この観点から, これは②の「生産要素」機能へと組み込むことが可能である。

以上のように, オーストリア学派の多様な資本概念は, それぞれ3つの資本機能に分類することができる。ブラウンは, 経済計算の重要性を訴えるため, 物的資本と貨幣資本を分けて考えた。しかし, この図5から事業を行う企業家にとって両者は不可分であるということが示される。それは, メンガーやミーゼスが, 貨幣資本を自らの資本概念としながらも, 同時に物的資本財から

18) 本稿における資本の「経済計算」機能とは「貨幣資本が利潤獲得の計算のための道具(指標)となっていること」を意味する。これは主として以下のミーゼスの「資本」および「経済計算」に関する議論を参考にした。「資本という概念は, 経済計算の基礎的概念であり, 市場経済における問題を処理するための主要な精神的用具である。…取得のための諸財の全体が, 貨幣で評価され, この金額(資本)が, 経済計算の出発点である」(Mises [1949] 1996, 260-61 / 訳 295)。「経済計算の他の批判者たちは, 経済計算が, 生産手段の私有に基づく社会秩序における, 分業の経済体制で行為する人々にのみ, 利用可能な方法であることを理解していない。経済計算は, このような社会秩序の制度的背景の中で活躍する, 個人または個人の集まりが考慮すべき問題にしか, 役立たない。したがって, それは私的利潤の計算であって, 「社会福祉」の計算ではない」(ibid., 216 / 訳 245)。ミーゼスは, 社会主義経済計算論争において, 私的所有のない社会主義体制下における経済計算の不可能性を論じた。ミーゼスの経済計算論の重要な点は, この議論がマクロの視点ではなく, 人間行為の観点, つまり資本主義体制下における個々の企業家や社会主義体制下における計画者や権力者の観点から行われていることにある。Kirzner (2010, 134-36), 尾近 (2003, 365-66, 370) も参照せよ。

構築される資本構造を認識する視点を持っていたことが暗に示していたことでもある。

2. 企業家機能と資本

本項では、現実時間の中で企業家機能と資本機能の関係を分析することで、オーストリア資本理論の「企業家的視点」の理解をさらに深めていく。企業家は、過去の出来事を変えることはできないが、彼はそれを解釈し、何らかの学びを得る。企業家は、彼の目的のために将来を予測し計画を立て、それを実行する。このように企業家は、現実の時間の中でこそ、その機能を発揮するのである。

現実の時間概念を特徴づけるのは、「不可逆性」と「不確実性」である。これらの特徴によって、時間は「過去」、「現在」、「未来」に大別される。「現在」とは、人が存在し活動するただ一点であり、現在の出来事はすぐに「過去」のものとなる。人は、「過去」に起こった事を変更することはできない。これが時間の「不可逆性」である。「未来」とは、後においてのみ活動を行う場所である。人は将来の活動の場である「未来」の状況をすべて知ることはできない。これが将来の「不確実性」である。そして「不確実性」は、現在から離れるほど大きくなっていく。

本稿では、上記のような特徴を持つ現実時間の中で重要となる企業家機能を「環境の把握・解釈」、「環境の見積り」、「計画の策定・改変」、「生産の実行」の4つの機能に集約する¹⁹⁾。図6は、これら企業家機能と先に述べた3つの資本機能がどう関係しているかを示している。4つの四角は企業家機能を示す。二重線と点線の矢印はそれぞれの資本機能と企業家機能のつながりを示す。

企業家は、「過去」から「現在」に至るまでの様々な出来事、消費者のニーズの分布や消費財価格、生産財価格、既存の資本構造のパフォーマンス（収益率）などを把握し、解釈する。これが企業家の「環境の把握・解釈」機能である。企業家は、それら解釈を基に、「未来」の諸状況を予測し、消費財、資本財などの価格などを見積る。これが「環境の見積り」機能である。見積りに関してどの程度の先の将来まで行う必要があるかは、企業家の目的に左右されるだろう。企業家は、それら予測や見積りを基に、自らの事業計画を策定する。これが「計画の策定・改変」

19) 本稿の企業家機能は、Menger (1871), Harper (1996), Lachmann ([1956] 1978), 江頭 (2003) を参考とした。代表的な企業家論として、シュンペーターやカーズナーらの理論がある。しかし、彼らの企業家論は、前者は「イノベーション（新結合の遂行）」、後者は「利潤機会の発見」という機能に特化しすぎている。それらは、市場経済を運行させる重要な力であるが、一連の生産プロセスでの企業家機能の分析には若干不向きである。メンガーは、企業家の機能として、(a) 情報収集、(b) 経済計算、(c) 生産の意思行為、(d) 効率性の監督、の4つを指摘した。ハーバーは、企業家機能を生産のプロセスに沿って順に「環境の把握・解釈」、「計画の立案」、「実行」、「計画の遂行状況の観察」、「環境の再把握」、「計画の修正・再立案」とした。ハーバーの企業家機能は、江頭 (2003) に詳しい。ラックマンは、企業家の生産行為を「期待の形成」、「計画の策定」、「資本結合体 (capital combination) の構築」、「計画の評価」というプロセスで分析している。これら企業家論は、生産プロセスの中での企業家機能と資本機能の関係の分析に適している。シュンペーターとカーズナーの企業家機能を本稿の分析に取って代はめるならば、前者は「計画の策定・改変」と「生産の実行」に、後者は「環境の見積り」に位置づけることができる。

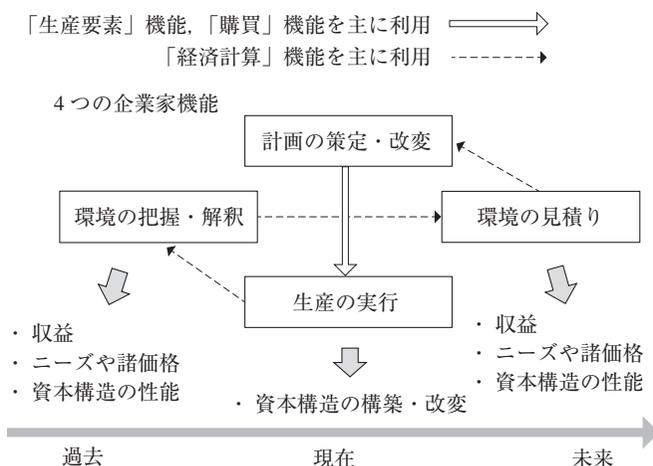


図6 資本機能と企業家機能

機能である。そして企業家は、その計画に従って、資金を収集し、資本構造を構築することで、「現在」において生産を実行する。これが「生産の実行」機能である。だが、この生産が企業家の計画通りに進むことは稀である。企業家は環境を再び解釈し、計画を修正することで、より効率的で消費者のニーズに合った生産へと近づけてゆく。生産とは、これら4つの企業家機能が繰り返される永遠のプロセスである。

次に、これら企業家機能と資本機能の関係を説明する。企業家は、貨幣資本の「購買」および「経済計算」と物的資本の「生産要素」の3つの機能を用いて、彼自身の役割を發揮する。

企業家の計画が現実世界に実体化する時、つまり企業家が「生産の実行」機能を果たす際に、資本の「購買」機能と「生産要素」機能は用いられる。資金収集の方法とその量、資本財購入のタイミング、資本財の機能と補完関係、これらはすべて企業家の「計画の策定」によって決定される。だが、計画されただけで生産が起こるわけではない。実際に、企業家が、集めた資金を用いて、資本財を購入し、それらを配置、機能させてこそ、生産は実行される。このようにこれら2つの資本機能は、企業家が「生産の実行」機能を發揮する時に利用される。

対して、資本の「経済計算」機能は、計画の策定と評価の際に、利用される。企業家は、貨幣価格を用いて、環境を把握し、将来を見積り、計画を策定する。他方、その計画が正しい予測に成り立ったものであったのか、また他の諸計画と両立するものであったのかどうかは、事後的に現れる収益・損失によって示される。収益・損失は、諸財の貨幣価格の合計である貨幣資本の増減によって表される。企業家は、収益・損失を基に再び環境を把握・解釈して、見積りを行い、計画を改変する。つまり、資本の「経済計算」機能は、企業家が「環境の把握・解釈」、「環境の見積り」、「計画の策定・改変」の3つの機能を發揮する際に利用されると言える。

以上のように、企業家は、3つの資本機能を用いて、「環境の把握・解釈」、「環境の見積り」、「計画の策定・修正」、「計画の実行」を繰り返し、現実世界における生産を効率的かつ消費者のニーズに適したものと近づけてゆく。以上のことから、オーストリア資本理論が持っている資本機

能は、企業家的視点無くして理解できないということが明らかとなった²⁰⁾。

3. オーストリア資本理論の多様化の諸要因

本項では、オーストリア資本理論が多様性を持つに至った要因を説明する。本稿の主要な課題は、オーストリア資本理論の独自性にあるため、ここでは概略の説明に留めたい。これまで説明したようにE & Hとブラウンの論争で決着のつかなかった物的資本と貨幣資本という資本概念の問題も、資本機能の観点から整理することによって企業家的視点に統合することができた。しかし、この共通の視点を持ちつつも、理論の目的や強調する資本機能の違いから、多様な理論が生じることとなった。

まず、E & Hが指摘した均衡と不均衡の仮定について考える。メンガー、ミーゼス、シュンペーター、ラックマンらの資本概念は、定義こそ異なるものの明らかに企業家的視点に立っており、彼らの資本理論と企業家機能は密接に関連していた。他方、ベーム-バヴェルク、ヴィーザー、シュトリゲル、ハイエクは、それらを一部関連づけて考えていたものの、均衡状態を仮定したため、結論において彼らの資本理論は企業家機能と無関係に見えるものになってしまった。

ベーム-バヴェルク、ヴィーザーの資本理論に、企業家的視点を見出すことは可能である。例えば、Lachmann ([1947] 1977, 205)によれば、ベーム-バヴェルクの資本構造の意義は資本財の通時的な補完関係にある²¹⁾。また、後年Wieser ([1914] 1967)も経済の革新者としての企業家像を示した。これらは、彼らが定義した物質的資本と企業家の「計画の策定・改変」機能とに何らかの関係があることを示唆するものだろう。だが、彼らにとって、資本理論は分配の観点から利子や資本所得の水準を求めするための、副次的なものであった。利子率を定義するためには、資本を同質的なものと仮定せざるを得ず、結局、彼らの資本理論は均衡状態に制限されることとなった。この原因の一つとして、Vaughn (1994, 33-37)が指摘するように、彼らはメンガーや後のオーストリアンと異なり新古典派均衡理論から強く影響を受けていたことが考えられる。また、ベーム-バヴェルクにとって利子論構築が第一の目的にならざるを得なかったのは、当時台頭しつつあったマルクス理論への反駁があったためと言えるかもしれない²²⁾。

シュトリゲル、ハイエクらは、景気循環理論の基礎としてベーム-バヴェルクの資本理論を利用したが、その結果、彼らの資本理論は、ベーム-バヴェルク同様均衡論的となった。だが、この仮定は彼らの目的に適ったものであった。なぜなら、ハイエクが指摘しているように、彼らの目的は、「消費財価格の上昇はむしろ生産をより有利なものとする」と仮定するのが自然なように

20) 資本機能と企業家論の関係をさらに明確化することで、「資本財の転用問題」(ミーゼス、ハイエク、ラックマン)、「現金準備の機能」(シュトリゲル、ラックマン)、「労働の異質性の問題」(ハイエク、ラックマン)といったオーストリア学派独自の問題提起の意味をさらに深めることができる。

21) McCaffrey and Salerno (2014)は、ベーム-バヴェルクの企業家的視点に関して詳しく論じている。

22) ベーム-バヴェルクは、『資本と利子』の「搾取の理論」(Böhm-Bawerk [1884] 1890, 315-92)や『マルクス体系の終結』において、マルクスの労働価値説に基づく利子理論を批判している。

思われるにもかかわらず、それは恐慌の原因だという所説」(Hayek [1931] 2012, 242 / 訳 267) を説明するためであったからだ。シュトリグルは、消費財価格と利子率の関係を分析するため、労働者の生活を支える消費財の総体(生存基金)という資本概念を採用し均衡状態を仮定した。生存基金が資本となるためには、労働者が購入する消費財の構成が一定となる均衡状態を仮定しなければならない。他方 Hayek (1931) は、資本概念として生存基金を利用しなかったものの、彼の仮定する均衡状態においては、シュトリグルと何ら変わらず、生存基金が資本となった。

しかし、これらのことは彼らが企業家的視点を重視しなかったことを意味しない。例えば、Strigl ([1934] 2000, 135-60) は、景気循環の原因を銀行と企業家が景気の状態に応じて現金準備の量を変化させることに求めた。これは、シュトリグルが、資本の「生産要素」機能と企業家の「計画の策定・改変」機能に関連させていたことを意味する。ハイエクは、オーストリア景気循環論の基礎として、より厳密な資本理論を作り上げるために『資本の純粹理論』(1941) を執筆した。そこで、ハイエクは、平均生産期間の概念を放棄し、投資期間と資本財の異質性を導入したが、これも、資本理論において企業家の「計画の策定・改変」機能という企業家的視点を推し進めるものであった²³⁾。

メンガー、シュンペーター、ミーゼス、ラックマンは、共に企業家的視点に基礎づけられた資本理論を構築したが、重視する資本機能は異なっていた。メンガーは、『原理』第3章「価値の理論」において、企業家的視点に基づいた資本の「生産要素」と「経済計算」の2つの機能を明らかに認識していた。しかしながら、バーム-バヴェルクの構築した資本理論に反対するため、Menger(1888)では「経済計算」機能を持った貨幣資本を強調することとなったと考えられる。シュンペーターは、『経済発展の理論』で貨幣資本概念を採用した。彼の発展理論の要点は、企業家による新結合の遂行である。均衡状態を破壊する新結合は、銀行の信用創造によって供給される預金貨幣を用いてなされる。従って、シュンペーターにとって、強調すべき資本概念は、生産要素を購入するための機能を持つ貨幣資本であったと考えられる。ミーゼスにとって、最大の関心事は、自身が問題提起した社会主義経済での合理的な経済計算の不可能性の証明、つまり社会主義経済計算問題であった。ミーゼスは、社会主義体制下において、企業家の生産の指針となる市場価格がないために、合理的な生産は不可能であると指摘した。ミーゼスにとって、諸財の貨幣価値の合計である貨幣資本やそれを表わすための制度である会計は、合理的な経済計算を可能にする重要な手段であった。従って、ミーゼスは、資本財の転用問題を提起したように物的資本概念の重要性を理解していたにもかかわらず、貨幣資本の「経済計算」機能を強調した。ラックマンは、ハイエクと同様に景気循環の基礎として、資本理論に取り組んだ。だが、異質な資本財から構築される資本構造の変化を、企業家の計画の策定、実行、評価、改定という一連のプロセスに立ち戻って分析することで、オーストリアンの中で最も包括的に企業家的視点を取り入れた資

23) だが、一連の分析は実物的な新古典派的一般均衡理論のフレームワークの中で行われたため、企業家的視点は見えにくいものとなった。

本理論となった。

V お わ り に

本稿では、多様なオーストリア資本理論を企業家が利用する資本機能の観点から分類することで、それらの理論の中の共通項として「企業家的視点」があることを明らかにした。この視点こそオーストリア資本理論の「独自性」である。

まず、II節では、経済学における資本理論の役割とオーストリア資本理論の形成史を概観した。オーストリア学派は、資本主義社会の中心かつ多面的な役割を果たしている資本について、その多機能性を保持したまま理論化しようと試みた。その結果、オーストリア資本理論は学派初期から現代に至るまで多様性を持つに至った。

III節では、オーストリア資本理論の多様性とその分類をE & Hとブラウンの論争を用いて説明した。彼らは、オーストリア資本理論の独自性を企業家的視点に見出すものの、資本概念に関して見解は一致しなかった。

IV節では、企業の資産構成の変化のプロセスを用いて3つの資本機能に分類することで、それら資本概念の違いは、企業家的視点から整理・統合できることを明らかにした。そして、企業家的視点という共通項を持ちつつも、特定の資本機能の強調のため、オーストリア資本理論は多様となった。

今後の研究課題として、本稿では省略した他学派の資本理論との比較がある。例えば、本稿で一部触れた新古典派理論とのより詳細な比較があるだろう。また、新古典派資本理論への代表的な批判者として、イギリス・ケンブリッジ学派があるし、それはマルクス学派の中にも存在する。これらの資本理論とオーストリア学派のそれとの違いを詳細に検討することで、オーストリア資本理論の「独自性」は一層はっきりとするだろう。

(赤塚一範：元 國學院大學大学院研究生)

参 考 文 献

- Ahmad, S. 1991. *Capital in Economic Theory: Neo-classical, Cambridge and Chaos*. Aldershot: Edward Elgar.
- Blaug, M. 1996. *Economic Theory in Retrospect*, 5th ed. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Böhm-Bawerk, E. [1884] 1890. *Capital and Interest*, trans. by W. Smart. London: Macmillan.
- . [1889] 1930. *Positive Theory of Capital*, trans. by W. Smart. New York: G. E. Stechert.
- Braun, E. 2014a. The Menger–Lachmann Trajectory on Capital: A Comment on Endres and Harper. *Journal of the History of Economic Thought* 36 (1): 97–102.
- . 2014b. Menger on the Nature of Capital and its Structure: A Rejoinder. *Journal of the History of Economic Thought* 36 (1): 111–13.
- . 2015. Carl Menger's Contribution to Capital Theory. *History of Economic Ideas* 23 (1): 77–99.
- . 2017. The Theory of Capital as a Theory of Capitalism. *Journal of Institutional Economics* 13:305–25.

- Braun, E., P. Lewin, and N. Cachanosky. 2016. Ludwig von Mises's Approach to Capital as a Bridge between Austrian and Institutional Economics. *Journal of Institutional Economics* 12:847-66.
- Endres, A. M. and D. A. Harper. 2011. Carl Menger and His Followers in the Austrian Tradition on the Nature of Capital and its Structure. *Journal of the History of Economic Thought* 33 (1): 357-84.
- . 2014. Menger on the Nature of Capital and its Structure: A Reply. *Journal of the History of Economic Thought* 36 (1): 103-09.
- Faber, M. 1986. On the Development of Austrian Capital Theory. In *Studies in Austrian Capital Theory: Investment and Time*, ed. by M. Faber. Berlin: Springer.
- Faber, M., J. Proops, S. Speck, and F. Jöst. 1999. *Capital and Time in Ecological Economics: Neo-Austrian Modelling*. Cheltenham: Edward Elgar.
- Foss, N. J. and P. G. Klein. 2012. *Organizing Entrepreneurial Judgment: A New Approach to the Firm*. New York: Cambridge University Press.
- Garrison, R. [1985] 2015. A Subjectivist View of a Capital-Using Economy. In *The Economics of Time and Ignorance*, ed. by G. P. O'Driscoll and M. J. Rizzo. London: Routledge.
- . 2001. *Time and Money*. London: Routledge.
- Harper, D. A. 1996. *Entrepreneurship and the Market Process: An Enquiry into the Growth of Knowledge*. London: Routledge.
- Hayek, F. A. [1931] 2012. Prices and Production. In *The Collected Works of F. A. Hayek*, vol. 7, *Business Cycle*, Part 1, ed. by H. Klausinger. Chicago: University of Chicago Press. 古賀勝次郎・谷口洋志・佐野晋一他訳「価格と生産」『ハイエク全集 I-1 貨幣理論と景気循環・価格と生産』春秋社, 2008.
- . [1941] 2007. *The Collected Works of F. A. Hayek*, vol. 12, *The Pure Theory of Capital*. Chicago: University of Chicago Press. 江頭進訳『ハイエク全集 II-8, 9 資本の純粹理論』春秋社, 2011.
- Hicks, J. R. 1973. *Capital and Time: A Neo-Austrian Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- . 1974. Capital Controversies: Ancient and Modern. *American Economic Review* 64:307-16.
- Horwitz, S. 2000. *Microfoundations and Macroeconomics*. London: Routledge.
- Kirzner, I. M. 1966. *An Essay on Capital*. New York: Sentry Press.
- . 1976. The Theory of Capital. In *The Foundation of Modern Austrian Economics*, ed. with an Introduction by E. G. Dolan. Kansas: Sheed and Ward.
- . 2010. *Essays on Capital and Interest*. Indiana: Liberty Fund.
- . 2018. *The Essence of Entrepreneurship and the Nature and Significance of Market Process*. Indiana: Liberty Fund.
- Lachmann, L. M. [1947] 1977. Complementarity and Substitution in the Theory of Capital. In *Capital, and Expectations, and the Market Process*, ed. with an introduction by W. E. Grinder. Kansas: Sheed Andrews and McMeel.
- . [1956] 1978. *Capital and its Structure*. California: Institute for Humane Studies.
- . [1958] 1977. Mrs. Robinson on the Accumulation of Capital. In *Capital, and Expectations, and the Market Process*, ed. with an introduction by W. E. Grinder. Kansas: Sheed Andrews and McMeel.
- . 1976. On Austrian Capital Theory. In *The Foundation of Modern Austrian Economics*, ed. with an Introduction by E. G. Dolan. Kansas: Sheed and Ward.
- . 1986. *The Market as an Economic Process*. Oxford: Basil Blackwell.
- Lewin, P. 1999. *Capital in Disequilibrium*. London: Routledge.
- McCaffrey, M. and J. T. Salerno. 2014. Böhm-Bawerk's Approach to Entrepreneurship. *Journal of the History of Economic Thought* 36 (4): 435-54.
- Menger, C. [1871] 1994. *Principles of Economics*, trans. by J. Dingwall and B. F. Hoselitz. Grove City, PA: Libertarian Press. 安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社, 1999.

- . [1888] 1935. Zur Theorie des Kapitals. In *The Collected Works of Carl Menger*, vol. 3, ed. by F. A. Hayek. London: LSE Reprints of Scarce Tracts.
- . [1889] 1994. Toward a Systematic Classification of the Economic Sciences. In *Classics in Austrian Economics*, vol. 1, ed. by I. Kirzner. London: William Pickering.
- Mises, L. von. [1931] 1960. Inconvertible Capital. In *Epistemological Problems of Economics*, trans. by G. Reisman. New York: D. Van Nostrand.
- . [1949] 1996. *Human Action: A Treatise on Economics*, 4th ed. San Francisco: Fox & Wilkes. 村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社, 2008.
- Pellengahr, I. 1986. Austrian versus Austrian I: A Subjectivist View of Interest. In *Studies in Austrian Capital Theory: Investment and Time*, ed. by M. Faber. Berlin: Springer.
- Powell, B. 2010. Some Implications of Capital Heterogeneity. In *Handbook on Contemporary Austrian Economics*, ed. by P. J. Boettke. Cheltenham: Edward Elgar.
- Rothbard, M. N. 1962. *Man, Economy, and State: A Treatise on Economic Principles*. Los Angeles: Nash.
- Schumpeter, J. A. [1911] 1934. *The Theory of Economic Development*, trans. by R. Opie. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(上)(中)(下), 岩波書店, 2006.
- Skousen, M. 1990. *The Structure of Production*. New York: New York University Press.
- Solow, R. M. 1963. *Capital Theory and the Rate of Return*. Amsterdam: North-Holland.
- Strigl, R. [1934] 2000. *Capital & Production*, trans. by N. R. Hoppe and H. H. Hoppe, ed. by J. G. Hülsmann. Alabama: Mises Institute.
- Vaughn, K. I. 1994. *Austrian Economics in America*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Wieser, F. [1889] 1893. *Natural Value*, ed. by W. Smart. London: Macmillan.
- . [1914] 1967. *Social Economics*, trans. by A. F. Hinrichs. New York: Sentry Press.
- 江頭 進. 2003. 「企業家論カーズナー、ハーバー」尾近裕幸・橋本努編著『オーストリア学派の経済学』日本経済評論社.
- 尾近裕幸. 1998. 「社会主義の計算制度の限界と社会主義計算論争の射程—市場過程の制度的基礎としての損益計算」『比較経済体制研究』5:21-31.
- . 2003. 「経済計算と市場プロセス—サレルノの「ミーゼスとハイエクの非同質化」論の意義」『國學院経済学』(國學院大學) 51 (3-4): 325-83.
- 塘 茂樹. 1984. 「ボエーム=バヴェルク「第一利子論草稿」(1876)における利用説批判の基本思想」『三田学会雑誌』(慶應義塾大学) 77 (5): 693-713.
- 中山伊知郎. 1973. 『資本の理論—中山伊知郎全集 第4集』講談社.
- 藤田敬司. 2005. 「カール・メンガー『一般理論経済学』と現代会計」『立命館経営学』(立命館大学) 44 (2): 1-21.
- バーム・バーヴェルク. [1896] 1969. 木本幸造訳『マルクス体系の終結』未來社.
- メンガー, C. [1883] 1939. 福井孝治・吉田昇三訳『経済学の方法に関する研究』岩波書店.
- . [1923] 1982-84. 八木紀一郎他訳『一般理論経済学 遺稿による「経済学原理」第2版』みすず書房.
- 八木紀一郎. 1988. 『オーストリア経済思想史研究—中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会.

Distinctiveness and Plurality of the Austrian Capital Theory: The Entrepreneurial Perspective on Capital

Kazunori Akatsuka

Abstract:

In the real world, an entrepreneur requires capital to produce. Thus, the Austrian school of economics, which theorizes the real economic world as it is, must be based on capital theory. This means that distinctive areas of the Austrian school of economics, such as Business Cycle, Economic Calculation, Entrepreneurship, Knowledge, Spontaneous Order, and Market Process must be understood based on capital theory. However, Austrian Capital Theory (ACT) is not a unique theory; rather, it is plural. This plurality makes understanding its diverse roles in Austrian Economics difficult.

Examining these plural theories, I find the shared similarity in these theories lies in the viewpoint of an entrepreneur. In the first place, we reveal the plurality of ACT by tracing its genealogy. Next, we classify them using the controversy between Endres & Harper and Braun in the *History of Economic Thought* (2014). Lastly, I group them into three capital functions by ranking plural concepts of capital alongside a process of change in entrepreneurial asset composition. These functions are 'production factor,' 'purchase,' and 'calculation.' Plural concepts of capital are integrated into the viewpoint of an entrepreneur who uses the three functions to produce in the real world. That is a distinctive feature of ACT, and this also means that ACT and entrepreneurship theory are never isolated. Rather, this distinctiveness becomes one of the sources of its plurality.

JEL classification numbers: B 13, B 25, B 41.